

1 レンズの歪曲収差とは何か

収差を大別すると、単色収差と色収差に分けられる。歪曲収差は単色収差のひとつである。単色収差には記述方法の異なる光線収差と波面収差の分類があるが、物理的実体は同じであり、光線収差を求めるために、屈折面においてスネルの法則を用いて光線を追跡するとき、近似していくなかで、光線収差には5つの分類が出来上がる。これはザイデルの5収差と呼ばれ、歪曲収差はそのひとつとされている。ザイデルの5収差は以下のような式で表される。このとき、物点を通るようにyz-面を選び、極座標を用いる。

$$\Delta x' = Ar^3 \sin \theta + Br^2 y \sin 2\theta + Dr y^2 \sin \theta \quad (1)$$

$$\Delta y' = Ar^3 \cos \theta + Br^2 y(2 + \cos 2\theta) + (2C + D)ry^2 \cos \theta + Ey^3 \quad (2)$$

ここで、A,B,C,D,E は球面収差、コマ収差、非点収差、像面収差、歪曲収差を表す収差係数である。y は像高、r, θ は主平面上の極座標系で表される射出瞳の半径と長さを表す。ここで、r=0 のときを考える。つまり、

$$\Delta x' = 0 \quad (3)$$

$$\Delta y' = Ey^3 \quad (4)$$

以上の式から、光軸からの像高のみに依存した項のみが残っていることがわかる。この項により表される収差を歪曲収差または、ディストーションと呼ぶ。歪曲収差は光軸に垂直な平面上にある物体は、光軸に垂直な平面上に結像するため、像は鮮明となる。しかし、光軸から離れた部分ほど形状が歪む性質が観測できる。歪む形には糸巻き型 ($E > 0$) や樽型 ($E < 0$) が挙げられる。歪曲収差は像点のずれが像高の3乗に比例するため、像の大きさによって横倍率が異なることにより生じる。つまり、入射光線の画角または像高により、結像倍率が異なってしまう。

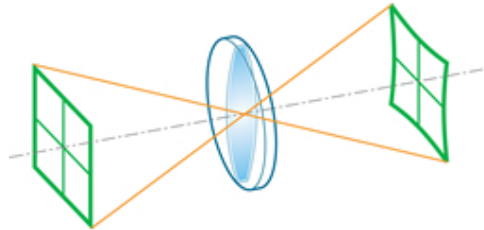


図 1: 歪曲収差 [2]

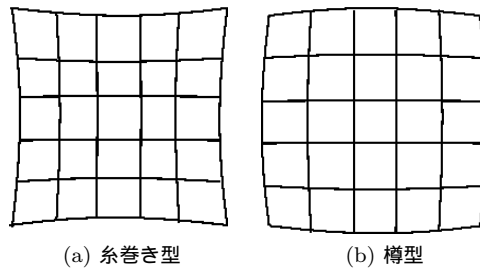


図 2: 歪曲収差による観測できる形

2 レンズの歪曲収差の校正方法について

歪曲収差は半径方向歪みに分類され、これはレンズの形状に起因する。レンズの特性から、レンズの中心から離れた場所を通過する光は近くを通過する光よりも大きく曲げられる。この特性より、光学の中心において歪みは観測されなく、周辺部分に行くに従って歪みは大きくなる。現実では、この歪みは小さいものであり、光学中心からみた半径を r とし、 $r = 0$ 付近でのテイラー級数を求め、近似値として表せる。

$$x_{corrected} = x(1 + k_1 r^2 + k_2 r^4 + k_3 r^6) \quad (5)$$

$$y_{corrected} = y(1 + k_1 r^2 + k_2 r^4 + k_3 r^6) \quad (6)$$

一般的には、第二の項を用いるが、魚眼カメラのように歪みの大きいカメラの場合は第三の項を使って近似する。

この他にも、レンズの組み合わせによる校正方法が挙げられる。

3 歪曲収差以外の収差とその特徴について

1 章にて、収差には単色収差と色収差が存在すると述べた。また、単色収差にはザイデルの 5 収差がある。

3.1 ザイデルの 5 収差

3.1.1 球面収差

球面収差とは、レンズ面が球面であることにより発生する収差である。

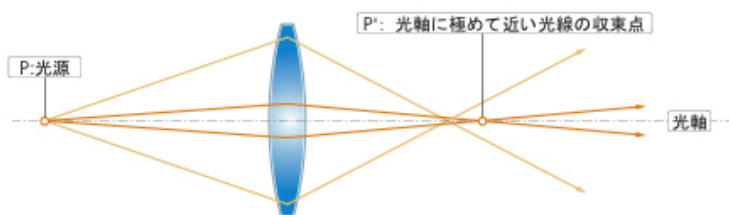


図 3: 球面収差 [2]

3.1.2 コマ収差

コマ収差とは、光軸より離れた物点の横倍率が物点の位置により異なる収差のことをいう。

3.1.3 非点収差

非点収差とは、子午光線と球欠光線に対する焦点距離の違いのことをいう。

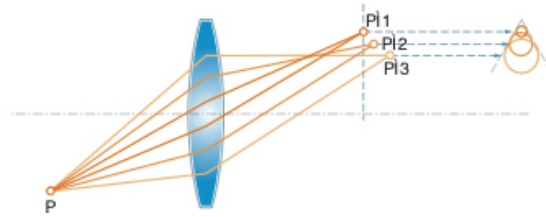


図 4: コマ収差 [2]

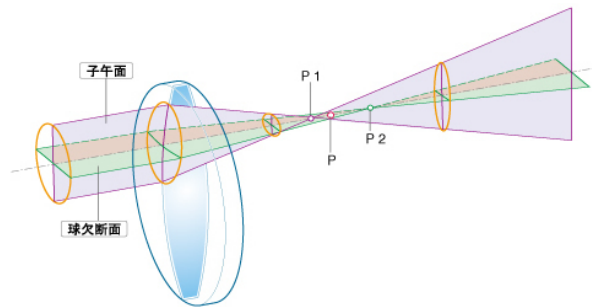


図 5: 非点収差

3.1.4 像面収差

像面収差とは、光軸に平行な光線と傾いた光線が、光軸に垂直な同一面に結像しないことをいう。

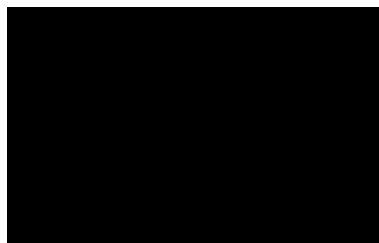


図 6: 像面収差

3.2 色収差

参考文献

- [1] M. ボウン, E. ウォルフ, (訳:草川徹・横田英嗣), ” 光学の原理 I ”, 1994 年第八版
- [2] ニコン, ”双顕微鏡の構造と光学技術”, http://www.nikonvision.co.jp/how_to/guide/binoculars/technologies/technologies_08.htm